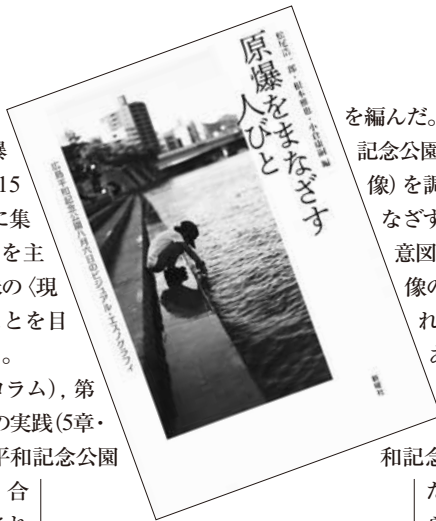


本書は、1945年8月6日の午前8時15分に米軍が原爆を投下してから70年経った2015年8月6日の広島平和記念公園に集まる「原爆をまなざす人びと」を主対象にして、「原爆の災禍の意味の〈現在地〉」(p.6)を明らかにすることを目指した共同研究の成果物である。

第I部 課題と方法(2章・2コラム)、第II部 ビジュアル・エスノグラフィの実践(5章・3コラム)、第III部 八月六日の平和記念公園という場所(3章・3コラム)の、合計3部・10章・8コラムで構成されている。また、本書記載のPWで本プロジェクトによって制作された6編の映像作品(全282分)を見ることができるようになっており、第II部の各章は「映像作品群についての注釈という意味合い」(p.v)も付与されている。文章と映像作品との相互参照という点でも、「実験的な書物」(p.270)と言い得る。

本稿では、本誌の特性と紙幅の関係で原爆研究の側面に関しては触れずに、ビジュアル社会調査の方法論に焦点を当てる。

松尾らは、「平和記念公園の光景を予断にとらわれることなくまなざし、ありのままに受け止め、それを包括的に記録すること」(p.23)を企図して、ビデオカメラを用いた「集合的観察」というビジュアル調査法を採用した。集合的観察の先行例(松平誠の「集団参加観察」と後藤範章の「集合的写真観察法」)が専ら「集合的な質的データ解釈法」であり、解釈行為における集合性に力点が置かれるのに対して、ビデオカメラによって「『見ること』そのものを集合的に行う…観察行為における集合性」(p.40)に第一義的な力点を置いたのだという。そして、12名もの「調査員の目を、平和記念公園内のさまざまな場所に向けて、同時かつ集合的に、しかも組織的に観察」(p.40)し、総計2,500ショット、81時間の映像を撮影して、ビジュアル・エスノグラフィ



原爆をまなざす人びと

広島平和記念公園八月六日の
ビジュアル・エスノグラフィ

松尾浩一郎
根本雅也
小倉康嗣

編

新曜社
2018年
A5判, 304頁
2,800円+税

を編んだ。12名の調査者が撮影した平和記念公園に集う人びとの〈まなざし〉(映像)を調査者自身が「繰り返し見る(まなざす)こと」(p.269)で、「撮影者が意図していないもの」(p.69)や「映像のなかにメタレベルで写し込まれている」(p.76)撮影者自身のありようや「撮影者と被写体との関わり」の「重層的な意味」(p.150)をも読み取って、平和記念公園の人びとの「構造化されたまなざしの集合性」(p.149)や「集合的無意識」(p.150)というものを、「再帰」(p.v・vi・28・45・91・129・151・260・265)のかつ「対話」(p.vii・45・217・257・259)的にあぶり出そうとしたのである。

こうした実験的で野心的な試みは、ビジュアル調査/社会学の可能性を押し広げるという意味で評価に値する。ただ、時間的・空間的な文脈に規定された「人びとのまなざしの集合性」を写し撮る、同上文脈とも決して無関係ではないはずの個々の「調査者のまなざしの集合性」(=「観察行為における集合性」)が、一体いかなるもので、映像に反映する集合的な「集合的無意識」の「構成」にどのように接続するのか(観察者の集合性と被観察者の集合性)、あるいは観察の集合性と解釈の集合性がどのように分別できるのか等については、結局よく分からなかった。これらの点については、「『レプリカ交響曲』の平面イメージ」(p.120)の動画版を見ること(17モニターの同一平面上での同時視聴)ができれば、ある程度透視できるかも知れない。

記念碑的な作品ゆえに検討すべき点は他にもあるのだが、残念ながら制限字数に達してしまった。社会調査に関わる方々に、ぜひ本書を読み、映像作品をご覧いただきたい。



山本耕平

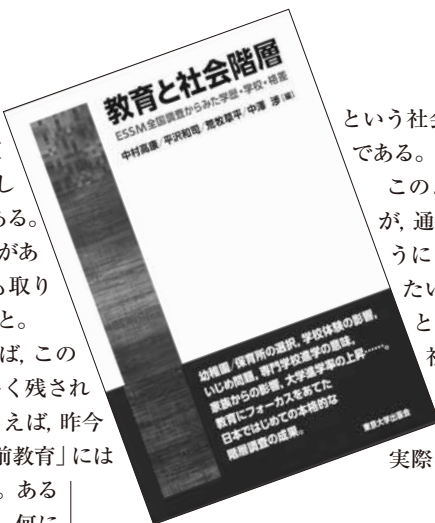
京都大学
文学部 非常勤講師

社会階層論に馴染みのある読者ならば、率直に言って「またか」と反応してしまいそうなタイトルである。教育に社会階層間の不平等があることは、もはやNHKでも取り扱う「常識」ではないのか、と。

しかし、少し考えてみれば、この問題には未知なる領域が多く残されていることに気づく。たとえば、昨今しばしば話題に上る「就学前教育」には社会階層の影響は及ぶのか。あるいは、親の教育期待の差は、何によって形成されるのか。こうした、教育と社会階層との連関という確立されたビッグ・ピクチャーのなかで、今なお残された間隙にアプローチすることを試みたのが、本書のベースとなる「教育・社会階層・社会移動全国調査」(ESSM2013)である。

編者が序章で述べるように、この「間隙」はたんに手つかずであるだけでなく、教育と社会階層との連関を生み出すメカニズムを説明するうえで重要であるにもかかわらず、従来の社会階層論関連の調査には組み込まれにくかった、いわばブラックボックスとしての「間隙」である。たとえば、2章で扱われている「被いじめ体験」や、3章で扱われている「教育体験」(勉強への取り組みや逸脱行動)は、出身階層と関連する可能性があると同時に、後の教育達成に影響を及ぼし得るものだが、従来の調査でそれらが測定されることはなかった。社会科学の目的の一つが社会現象の生成メカニズムの解明であるならば、そうしたブラックボックスに切り込まんとする本書の価値は大きい。

さらに本書は、教育というテーマに限らず社会調査に関心のある読者にも推奨できる。先行研究に見られる理論と実証の乖離を明らかにし、その乖離に実証的にアプローチするための工夫を凝らす、



教育と社会階層

ESSM全国調査からみた
学歴・学校・格差

中村高康
平沢和司
荒牧草平
中澤 渉

編

東京大学出版会
2018年
A5判, 246ページ
4,400円+税

という社会調査の醍醐味に触れられるからである。

このように本書は貴重な学術的成果だが、通読すると、焦点がぼやけているようにも感じられたことを指摘しておきたい。編者はESSM2013の問題意識として、「学校生活の具体的な状況と社会階層との関連」(p.3)が一般的な社会階層関連の調査では検討できないことを挙げている。しかし、実際に「学校生活の具体的な状況」が

組上に載せられるのは、最大限に広く解釈しても、先に挙げた2章と3章のほか、7章(オジオバの学歴と本人の学歴との関連)や、8章(親の教育意識と教育期待の関連)くらいである。他の章は、就学前教育と出身階層(1章)、専門学校への進学(4章)、成績と学歴との関連(5章)、世帯所得と大学進学(6章)といったテーマを扱っており、むしろ従来のアプローチを精緻化することで、これまで見出されていなかった社会階層と教育の連関を探求する、といった趣が強い。教育の有用性に対する人びとの評価を

分析した9章は、やや浮いている。さまざまな領域に点在する「間隙」に目を向ける以上、焦点が拡散するのは避けられないとはいえ、構成の工夫や各章間のクロスリファレンスによって、点と点をつないで見せることは可能だったのではないか。

もっともこの問題点は、教育と社会階層という問題群において、取り組むべき課題がまだ山積していることを物語るものでもある。本書で提示されたものも含め、教育と社会階層という問題におけるさまざまな「間隙」を結びつけ新たな全体像を示すことは、今後の研究に託された課題である。二次分析データの公開も計画されているようなので、本書を出発点とする今後の研究の進展が期待される。

本書は小樽運河保存運動に関する30年以上にわたる調査研究の成果である。このような長期にわたる調査は、都市研究ではまれである。特定の社会運動の最初から最後まで扱ったものも少ないかもしれない。全編500ページの大著であり、評すべき論点は多いが、ここでは本誌の性質上、調査研究の方法に関する部分を中心に述べてみたい。

著者は学生時代に小樽を訪れて以降、継続的に調査を行い、大学の教員になってからは、調査実習というかたちで毎年継続している。関係者への聞き取り調査を基本としつつも、議会の議事録や委員会の速記録だけでなく、他の研究者やジャーナリストが残した報告書や記録をも縦横に駆使している点に、まず注目すべきである。すなわち、書かれた資料の収集と分析という方法である。社会調査の方法論ではことさらに言及されることはないが、実際の現場ではもっとも重要かつ多用される方法である。

本書は主として聞き取り調査で得られた知見を、文書資料でどのように裏づけるのかや、調査報告を書くにあたって、書かれた資料を最低限どこまで確認すべきかを教えてくれるという点で、格好のテキストである。おもしろいことに、本書ではサーベイ調査の方法だけが（二次資料としての言及が一部あるだけで）扱われていない。その代わりに、商店街の定点観測調査のデータが活用されている。これは、かつて建築学のグループが行った建物の変化を記録した悉皆調査を引き継ぐかたちで、社会学的な聞き取り調査のデータも付加しながら継続的に収集したもので、本書の独自の貢献となっている。さらに土地所有構造の変遷も確認し（これも意外と都市調査ではまれである）、言われるほど小樽の商店街は外部資本に支配されていないことを明らかにしている。ここで客観的な事実と



町並み保存運動の 論理と帰結

小樽運河問題の社会学的分析

堀川三郎 著

東京大学出版会
2018年
A5判, 506頁
8,000円+税

主観的な言説とのズレが分析されている。この部分と、主要人物のライフ・ヒストリーを運動の展開と重ね合わせて分析する5章が、もっともスリリングで、本書の圧巻といってよい。

さて、この短い書評ではとても論じきれない本書の内容と論点についても、少しふれておきたい。運河を埋め立てて道路を造ろうという近代都市計画の発想は「空間」を無色透明で自由に

加工可能なものにとらえているのにたいして、保存運動は運河を、小樽を小樽たらしめる「場所」として、思い入れや記憶、歴史を含み込んだ物質的な基盤にとらえている。本書ではこの点を両者の分岐点と定め、最終的には「保存とは変化することである」という意外な結論を導く。しかしこの表現の意外さにとらわれてはいけぬ。重要なのは、誰がどのように変化させるのかである。これまでその都市を生きた人々の歴史的な営みをふまえながら、それを無かったこと

にするのではなく、何らかのかたちで尊重・継承しながら、自らの判断と努力で引き継ぐことこそが保存なのである。経済的な合理性や行政的な整合性ではなく、都市を生きる人々の織りなす社会の自治的な継続性が問われているのだ。

最後に、改めて本書の最初の問い、「なぜ景観を保存するのか」にもどることにしよう。社会は均質で透明な空間の上にただ展開しているわけではない。具体的な場所を人々の社会的つながりの物質的基盤として、いやそれ自体も社会そのものとして含み込みながら存立している。それゆえ、ものを保存することは、われらの社会を保存することと同じである。社会の継承に疑問を呈する人などいないだろうし、それが自治的であるべきことを否定する人もいないだろう。



永吉希久子

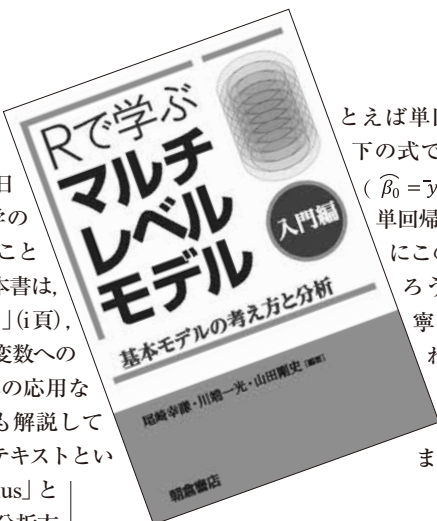
東北大学
大学院文学研究科 准教授

階層的構造をもつデータの分析に必要なとなるマルチレベル分析は、今日では広く使用され、統計学のテキストでとりあげられることも多い。そのようななかで本書は、「数理的基礎をおさえながら」(i頁)、縦断データやカテゴリカル変数への対応、共分散構造モデルへの応用など発展的な内容についても解説している点で、これまでにないテキストといえる。さらに、「R」と「Mplus」というソフトウェアを用いた分析方法も解説されている。

本書は「入門編」と「実践編」の2冊からなる。「入門編」では階層構造をもつデータの分析になぜマルチレベル分析が必要なのかを示すとともに、級内相関、デザイン効果、中心化などの主要な概念や、ランダム切片モデル、ランダム係数モデルという基本モデルを説明する。そのうえで、これらのモデルの適用例を4つ紹介している。

「実践編」ではより発展的なモデル——従属変数がカテゴリカル変数となったマルチレベル一般化線形モデル、縦断データへの適用、マルチレベル共分散構造モデル(マルチレベルSEM)——について解説している。そのうえで、これらのモデルの5つの適用例を紹介している。

本書の特徴として、「なぜそうなのか」を数理的に丁寧に説明している点が挙げられる。日常言語を用いて感覚的に統計を理解させるテキストが多いなか、本書は数式の展開によって説明する。これは諸刃の剣でもあり、「統計学の初級コースに関する基礎事項について学習済み」という読者層の想定からすると、ややハードルが高いかもしれない。たとえ「基礎事項を学習済み」であっても、本書が求めるレベルに達しているとは限らない。た



例えば単回帰の切片と係数について、「以下の式で求められます」として推定量の式($\hat{\beta}_0 = \bar{y} - \hat{\beta}_1 \bar{x}$, $\hat{\beta}_1 = \frac{s_{xy}}{s_x^2}$)が示されているが、単回帰について学んだ人のなかで、すぐにこの式が導ける人がどれだけいるだろう。ただし、説明自体は非常に丁寧なので、数式を追えば、これまでわかった気になっていたあやふやな点を、明確に理解できるようになる。

また、マルチレベル分析に関連する重要点が見落とされがちな点について、網羅的に説明する点も本書の特徴である。たとえば、「入門編」では、レベル1の変数の平均値をレベル2の変数として扱う際の注意点や、中心化の使い分けが説明され、「実践編」では、縦断データにマルチレベル分析を適応する際の誤差の自己相関構造の問題や、文脈効果のバイアスの修正、マルチレベルSEMにおける二つの推定方法(最尤推定とマルコフ連鎖モンテカルロ法)の違いが取りあげられている。このため、マルチレベル分析について一定の知識がある人でも、新たな知識を得られるだろう。

ただし、Mplusは基本的なコードの書き方から説明があるが、R

はマルチレベル分析を行うための説明が中心で、基本的なデータの取り扱いやコードの書き方は説明されておらず、事前の知識が必要となる。

本書は数式や数学記号に慣れていない人にとってはややとつきにくいかもしれないが、マルチレベル分析の根本的理解へと導く良書であるのは間違いない。初学者にとどまらず、すでにマルチレベル分析を知っている、さらには使ったことがある人にとっても、より正確な分析のために必読の書である。

Rで学ぶ マルチレベルモデル

入門編

基本モデルの
考え方と分析

朝倉書店
2018年
A5判, 212頁
3,400円+税

実践編

Mplusによる
発展的分析

朝倉書店
2019年
A5判, 264頁
4,200円+税

尾崎幸謙
川端一光
山田剛史

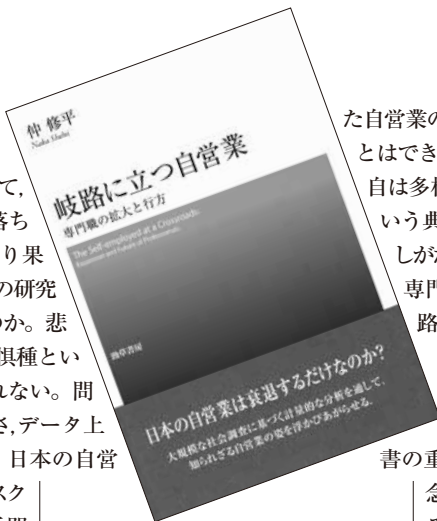
編著

自営業研究はなかなか難しい。

自営業者は年々着々と減少して、ついに就労人口の10%程度に落ち込み、もはや社会の少数派となり果てた。この事柄の重要性を、他の研究者にどのように知ってもらうのか。悲しいかな、社会科学では絶滅危惧種というだけでは希少価値は認められない。問いの立て方や分析手法の複雑さ、データ上の難しさを考慮したとしても、日本の自営業研究は、研究者キャリアのリスクのない大御所たちによって片手間でなされてきた感が強い。そのなかであって、「専門自営業」というキーワードを引っ提げて、果敢にも自らの研究者キャリアの出発点を自営業研究と定めた若手研究者の書籍が出版された。本書である。

序章と終章を含めて8章構成だが、一つひとつの章は20~30ページで、全体がコンパクトにまとめられている。序章は本書の執筆動機をまとめたもので、第1章に先行研究のレビューを配している。本書は「自営専門職」というカテゴリーを中心に据えており、伝統的な自営業研究の主流とは異なる視点を確保している。その点を強調するために、これまでの自営業研究の主要課題だった失業と自営業との関連をわざわざ第2章に挿入し、伝統的自営業研究が日本の現状を考察するにそぐわないことを示している。第3章以降が本書の主張の核で、大きく分けて、「自営専門職」の定義と統計的趨勢(第3章)、職業履歴の特徴(第4章)、所得構造(第5章、第6章)の3つの論点を提示している。

本書の要約は終章でまとめられているので、読者諸氏にはぜひ実物に目を通していただきたいが、あえて評者がすれば、以下になる。まず、自営業の専門職化は着々と進行している。「自営専門職」という視点から見ると、日本で継続的に進行してき



岐路に立つ自営業

専門職の拡大と行方

仲修平 著

勁草書房
2018年
A5判, 224頁
4,500円+税

た自営業の衰退は額面通り受け止めることはできない。しかし、自営専門職の出自は多様で所得格差も大きく、これという典型的な自営専門職をイメージしがたい。著者は、この複雑な状況を、専門職化に突き進むか否かの「岐路に立つ」として解釈している。

個々の分析手法や解釈についてのコメントは、文字通り山のように湧いて出てくるが、本書の重要な貢献は、自営業に職種概念を堂々と持ち込んだことにあるのは明白である。通常、自営業者はマネジメントから現場までかなりの広範囲をカバーすると考えられており、自営業者を単一の職種に分類するのは過度の単純化ではないかという感覚がぬぐえない。あえて専門職分類を当てはめることで明らかになった、趨勢や所得格差の実態は貴重だろう。

この本書の姿勢は、職種概念と雇用形態概念(政府統計では従業上の地位)の関係について一石を投じている。伝統的には、このふたつの概念は独立に定義

されてきた。本書では簡単に「自営専門職」という言葉を使っているが、なぜ「専門自営業」ではないのだろうか。この問いは単なる言葉の綾ではない。近年発展したタスク編成の内生化など、労働市場のメカニズムの理解の深化は、両者の理論的関連を示唆しており、それは自営業研究とともに専門職研究の文脈を引き継いでいくはずである。逆にいえば、この交差点を明らかにすることが「岐路」の真の意味になるのではないだろうか。

冒頭述べたように、日本の自営業研究は、大御所たちの片手間でなされてきた感が強い。しかし、日本の経済社会の理解に貢献してきた大御所たちが、ことごとく自営業研究に手を染めていることもまた見逃してはならない。



大多和直樹

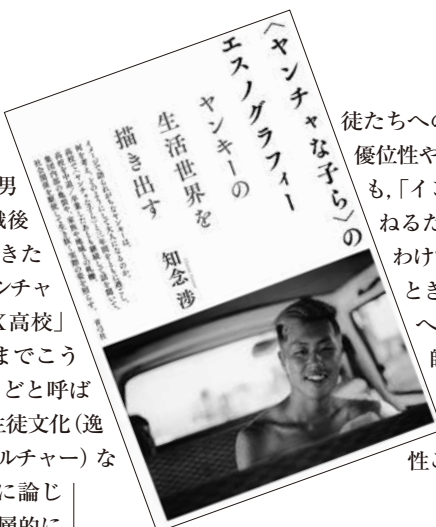
お茶の水女子大学 准教授

本書は、2009年に始められた長年のエスノグラフィーの成果であり、男子生徒を高校段階から就職後まで追跡している（追跡できた対象者は14人に及ぶ）。〈ヤンチャな子ら〉とは、対象校の「X高校」での呼び名である。これまでこうした若者は、「ヤンキー」などと呼ばれ、階層文化（貧困問題）・生徒文化（逸脱問題）・若者文化（サブカルチャー）などの領域でそれぞれ別々に論じられてきたが、それらを重層的に捉えてこそ、〈ヤンチャな子ら〉に接近できるとみている面で本書は意欲作といえる。評者は、生徒文化論に近しいところにおり、ここでは成績と反学校文化を結びつけるような単純な枠組みから彼らを論じる傾向にあるが、本書は、より繊細かつ重層的に彼らの生活世界を捉えている。

学校と労働世界を舞台とした逸脱の少年の社会学ということで、読者はP.ウイリスの「ハマータウンの野郎ども」の現代日本版という

意味合いを本書に込めながら読み進めることが考えられる。著者もそのことを意識しており、本書で描かれたものは、いわゆる「ヤンチャ」な若者のステレオタイプのイメージとも「ハマータウン」とも異なったオリジナルなものである。表層的理解を超えた独特の〈ヤンチャな子ら〉の文化、行動様式やその背景にある論理を浮き彫りにすることに成功しており、本書はこの領域の必読文献となると思われる。

本書で描かれる〈ヤンチャな子ら〉には、「野郎ども」が有していたようなたくましい自己確立や達観はみられない。彼らは、学校文化に同化できるわけではないが、生活困難を抱えた親たちのような人生は歩みたくないという思いから学校を完全に異化することもできない。〈ヤンチャな子ら〉は集団性の点でも「野郎ども」よりも曖昧で、「インキャラ」生



〈ヤンチャな子ら〉の エスノグラフィー

ヤンキーの生活世界を描き出す

知念 渉 著

青弓社
2018年
四六判, 276ページ
2,400円+税

徒たちへのからかいや嘲笑を通じて彼らの優位性や男性性を際立たせることはあっても、「インキャラ」生徒を学校権威に身を委ねるだけの「第二の敵」とみなしているわけではない。さらに、教師との関係も、ときに対立的であるが同時に自分たちへの対応を評価する側面もある。教師の側も、手を焼きながらも彼らを手にも負えない逸脱少年として排除したりはしない。こうした両義性こそが〈ヤンチャな子ら〉を特徴づ

けているものであり、彼らのことを深く知っているからこそその描き方であるといえる。

さらに本書は、〈ヤンチャな子ら〉を一括にして論じてはいけなとし、就職の様子等が家庭の関係性や貧困状況によって全く異なっていることを指摘した。〈ヤンチャな子ら〉自体に社会的諸資源が乏しい傾向がみられるが、その内部においても資源の多寡によって分断がみられるのだ。本書は、こうした問題を抱える彼らへの家庭・学校・社会での支援の方策を論じて締めく

くられる。本書で描き出された〈ヤンチャな子ら〉とは、そのイメージとは裏腹に社会的な諸資源が欠如した社会的弱者であり、支援を必要としている者でもあるということである。

それゆえか、本書と「ハマータウン」の読後感是对照的なものであった。評者は、かの「野郎ども」に対して「お前は、それだけのものをもっていながら一だからこそなのだが一なぜ自ら進んでその地位に留まってしまうのか」という強烈なやるせなさを感じた。他方、本書の〈ヤンチャな子ら〉は、確かにたくましく、したたかでもあるのだが、もともとから社会変革につながる何かを感じることはなかった。本書では、彼らの論理がよく示されているだけに、事例によっては「そうするのもやむなしか」と唸ってしまうような読後感が残ったことを付け加えたい。